

千葉県美術館
アーティストプロジェクト
報告書

つくりかけラボ05

松本力 |

SF とりはうたう ひみつを

会期

2021年

10月16日(土) - 12月26日(日)

アーティスト

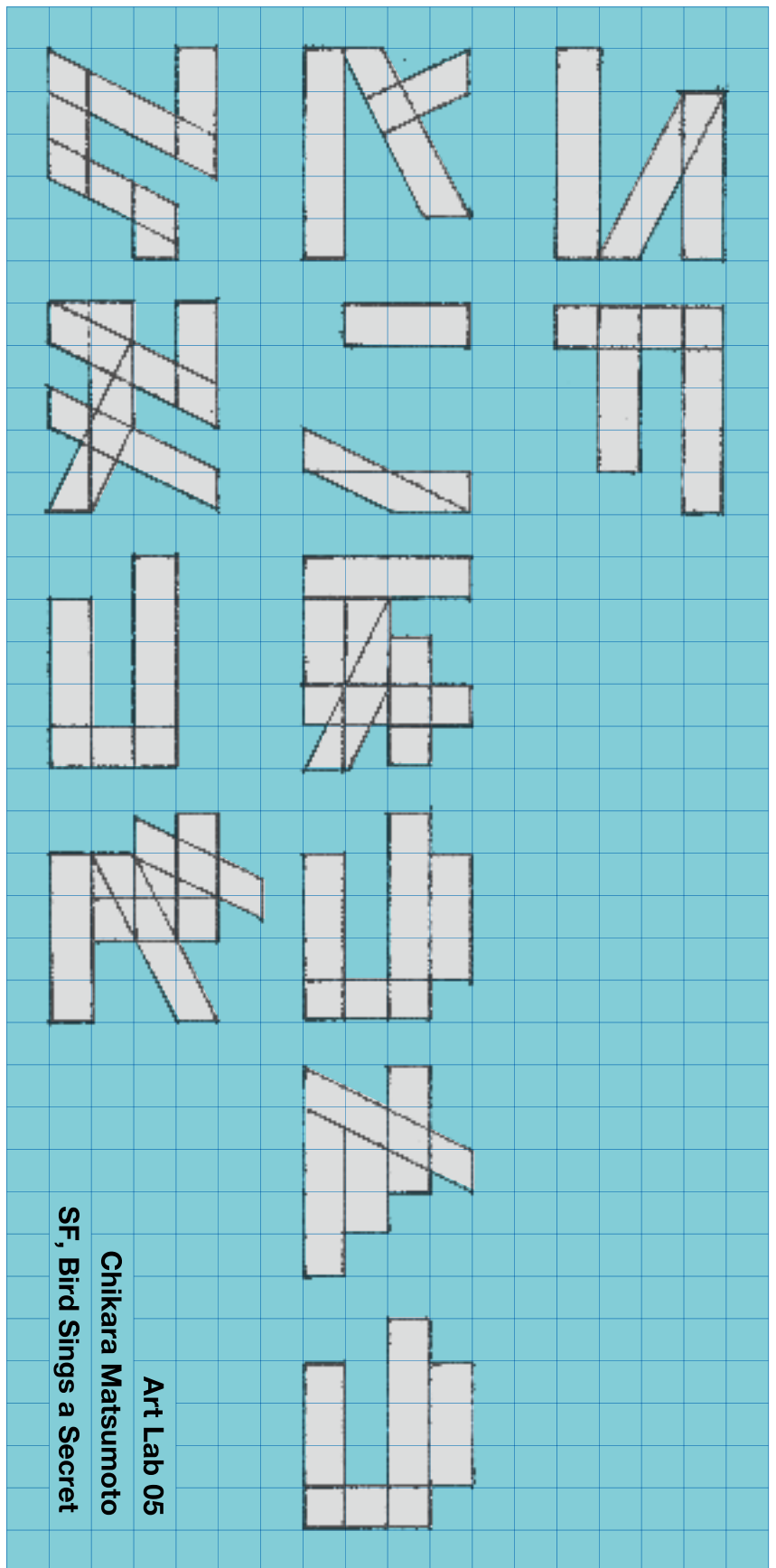
松本力

テーマ

コミュニケーションが
はじまる

概要

「つくりかけラボ」とは、「五感でたのしむ」「素材にふれる」「コミュニケーションがはじまる」いずれかのテーマに沿った公開制作やワークショップを通して空間をつくり上げていく、参加・体験型のアーティストプロジェクトです。今回のテーマは「SF」。会期を通して公開制作を続けたアーティストの松本力さんは、人間の社会生活からみたスズメたちとの共生に注目し、私たちの身の周りにある少し不思議なイメージや話を集め、「宇宙巣箱のSFラジオ局」や音声コンテンツ、スズメ目撃情報マップ、アニメーションなどいくつかのかたちでインスタレーションに組み込んでいきました。



SF, Bird Sings a Secret

Chikara Matsumoto

Art Lab 05

タイトルとロゴと広報印刷物

タイトルは展覧会を象徴する大切なものとして、何度もやりとりを重ねて話し合いました。そして、松本さんが再生紙に5mm角の方眼をつくり、タイトルのロゴマークを手描きすることから、展示の構成を詰めていきました。

ロゴマークは、「SFをテーマに、積み木のようなかたちで、人と鳥が共生する町並みや路地、お互いの孤独な関係性の集合を、なんとなく象徴するもの」。広報印刷物のデザインを担当していただいたサイトラビデユキさんとの打ち合わせを前に、松本さんはこれから始まる展覧会のタイトルとそのロゴに託した思いと、今回、そのチラシやポスターが担う重要な役割について、次のような言葉で表現しています。

SF とりはうたう ひみつを
2021: SF, BIRD SINGS A SECRET

このタイトルは、この展覧会の最小のステートメントにして、参加者との来る交流を示すアフォーリズムが、入口のように機能すると考えています。ロゴのイメージとしては、人と鳥が共生する町並みへの入口であり、積み木を組み合わせるようなかたちで、彼らとの相互に孤独で秘密の関係性の集合をSF的に象徴するデザインです。そして、このチラシが展覧会への紙切符、まるで『銀河鉄道の夜』のジョバンニの上着のポケットに、いつのまにか入っていた招待状のように、または、この展覧会の後先に部屋に貼っておきたくなるような、薄い赤みがかった青色とか、蛍光橙色のような紙の色に黒か銀色で刷られた、簡素かつ素敵な印象を想像しています。



そして、できあがったのがこちら。↑

会場には、松本さんが設計した宇宙巣箱を設置し、巨大な黒い本のようなオブジェを公開制作しました。そして、SF(少し不思議)な話を採集するための大きな机が登場しました。これらは、映画『2001年宇宙の旅』(スタンリー・キューブリック監督/1968年)へのオマージュとされ、「部屋の中の部屋で、人間サイズの巣箱で、一人乗り用の宇宙艇で、放送室」である、個室として作られました。

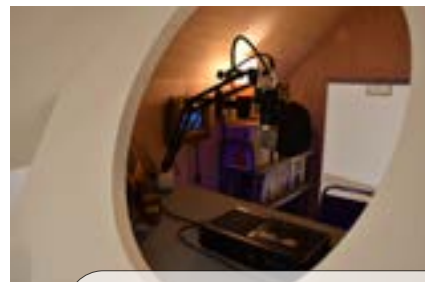


宇宙巣箱の内部



宇宙巣箱のSFラジオ局

宇宙巣箱のSFラジオ局には、録音再生のためのカセットテープレコーダーやスピーカー、SF関連の本などが備えられました。会場内だけの放送室、SFラジオ局と称して、来場者から少し不思議な体験談を集めました。ここでは、前に来た誰かが書いていった話を読んで、それらの中から気に入ったものをラジオのDJのように代読してカセットテープに録音したり、テープを再生して聞いてみることができました。



ポッドキャスト
『宇宙巣箱の
SFラジオ局』

子どもの頃のある冬の日、こたつに足を入れると、向かいの家の猫が先に入っていました。こたつの上に置いてあった、給食の残りの甘納豆パンも食べてありました。(K)

小3まで目をつむったら2歩で瞬間移動できました。(BARO)



中学時代、部活の大会の応援をしていたら、試合をしている女の人の後ろ姿が私とそっくりでびっくりした。どうしても顔が見てみたくて、応援そっこのけでその人を見てしまいました。本当にうりふたつでとても不思議な感覚でした。(chang)

スズメの目撃情報



「最近スズメをあまり見かけないけれど、彼らはどこでどうしているのか」。人間の社会生活からみたスズメたちとの共生に注目した松本さんの問いに対して、来場者からスズメの目撃情報を集め、美術館近隣地域の地図の周りに地域ごとに分類し、展示物として掲示しました。



「宇宙巣箱のSFラジオ局:すこしふしぎな話 収集シート」会期中/205枚
「宇宙巣箱のSFラジオ局:すこしふしぎな話 録音(ラジオDJ体験)」
11月23日(火・祝)~12月26日(日)/37件
「スズメの目撃情報収集シート」会期中/323枚
アーティストトーク 10月24日(日)/参加者6人

アニメーションワークショップ 「SF(スズメフィクション)」

11月7日(日)10:10~16:00 参加者16人
講師:松本力、ゲスト:VOQ(音楽家)

松本さんが国内外の様々な地域で開催してきたアニメーションワークショップ「踊る人形」を、今回は「SF(スズメフィクション)」と題して行いました。人間と同じように、スズメはどこにいて何をみて思っているのか、誰かと誰かの物語を交じり合わせながら、とりたちがうたうひみつを想像しました。

午前午後の二部構成で、前半は、二人一組で交代しながら、ポーズをとる相手の姿を1コマに描いていきました。午後は全員で、細長い紙の左端に誰かが描いた絵の続きを、別の誰かが模倣しながら描いていきました。そうやってできあがった長い紙をつなげ、少しずつ変化しながら連続するコマを、「絵巻物マシン」という手製映像装置で撮影して、アニメーションをつくります。

参加者と松本さんが描いた紙を全部つなぎ合わせると、全長で40メートルを超える大作となりました。後日、VOQさんがワークショップの間に採集した音や声を素材にしてつくった音楽も付けられ、アニメーション作品《スズメフィクション》が完成。インスタレーションの一部として展示に加えられました。

「踊る人形」という名前は、名探偵シャーロック・ホームズの同名の短編小説からの引用です。暗号は、一つ一つの記号や文字がつながって、かくされたメッセージがあらわれるように、アニメーションの一つ一つの絵から、一人一人がどこからなにをみているか、みんなの想像が小さな印象となって、映像という時間の物語が生み出されます。



《スズメフィクション》
8分4秒



VOQ+松本力 ライブパフォーマンス

12月11日(土)17:00~18:00 参加者25人
出演:VOQ(音楽家)、市川平(特殊照明作家)、松本力

会期終盤には、松本さんと長年にわたり活動を共にしてきた、音楽家のVOQさんをお招きして、音楽と映像のまなざしが交差する空間表現のライブパフォーマンスを行いました。また、ワークショップで参加者と共同制作したアニメーション作品《スズメフィクション》も披露されました。当日は特殊照明作家の市川平さんとのコラボレーションもあり、今回のプロジェクトが来場者やゲストとの関わりを通して変化し続けるインスタレーション作品として、また一つ異なる姿を見せる機会となりました。



「VOQ+松本力ライブパフォーマンス」1時間2分39秒
※「宇宙巣箱」の中に置かれたビデオカメラで撮影したライブの記録映像です。



VOQ ボック

音楽家。エレクトロニカバンド オルガノラウンジのボーカルとして活動、国内外での公演、アニエス・ベレパリコレクションへの招聘、細野晴臣氏からのレコメンドなど。アニメーション作家 松本力氏とは長年にわたり活動を共にしている。2018年PROGRESSIVE FORUMより1st「YONA」2nd「VEILS」をリリース。
<http://www.organ-o-rounge.org/voq/>
<https://soundcloud.com/voqqov>

市川平

いちかわたいら

特殊照明作家。1965年東京都生まれ。1991年武蔵野美術大学大学院修了。1991年第2回キリンコンテンツポラリアワード受賞、1993年第3回ジャパンアートスカラシップ受賞。1988年「ドームのないプラネタリウム」を制作、それ以降現代的なモチーフを選び彫刻でありながら様々な素材、要素を取り入れ、いわゆるSF的な物語性を感じさせる作品群を作り続けている。近年では「ドームツアープロジェクト」「マジカルミキサプロジェクト」「シークレットガーデンプロジェクト」などの目標達成型アートワークを手掛ける。2016年より元彫刻家の特殊照明作家として様々な現場で新たなフィールドを開発中。近年多数のコラボレーションワークを実現させている。

<https://m.facebook.com/taira.ichikawa>

最後まで作りかけであること

会期最後の2日間、会場の照明を少し暗くして、入り口左手の壁に映像を投影しながら、松本さんは新しいアニメーションを作っていました。この短いアニメーションが完成するまでの間も、多くの人がこの場を訪れ、制作の手を止めてのやりとりは続きました。

最終日はいつものように最後の来場者を見送ると、電気を消して鍵を閉め、松本さんは、いつものように相棒の赤い車で湾岸道路を2時間走る復路の帰途につきました。最後まで採集し続けた少し不思議な話の音声を、近々ポッドキャストで公開するつもりだ、と言いながら……。



ある日、展示室で「もしかして、恵比寿映像祭に出品されていましたか」ときかれて、「宇宙巣箱」をみて、映像祭の「黒い汽車」と同じ感じがした。「え、そうです!」と答えながら、ぼくも、「黒い汽車」をつくったのと「宇宙巣箱」をつくった人が、同じなのかどうか考えた。何かが続いていることに気づかされた。ずっと前に、ぼくのライブをみてくださっていた方も来てくれて、「いつか、宇宙船に乗って船出したい!」とぼくが叫んでいたということで、「松本さんの中で、それがちゃんと続いていたんだとおもうとうれしかった」と話してくれた。叫んだことを忘れていたが、小さな舟で大海へ漕ぎ出すような気持ちは、ぼくも忘れてはいない。

少し不思議な話の中に「この展示室で、人が交流することを、鳥が集まるようにしたかったのかもね」と手紙のように書かれていた。「ここに偶々来てみたのだけれど、全然違うのに、私の知っている懐かしい場所を思い出す」という人もいた。

ある人は「自分の部屋が無機質で好きになれなくて、友人宅を泊まり歩いている」と話してくれた。この妙な展覧会で、数ヶ月のあいだ、この展示室が、だれかとだれかにとっての新しい居場所となった瞬間もあったと信じたい。

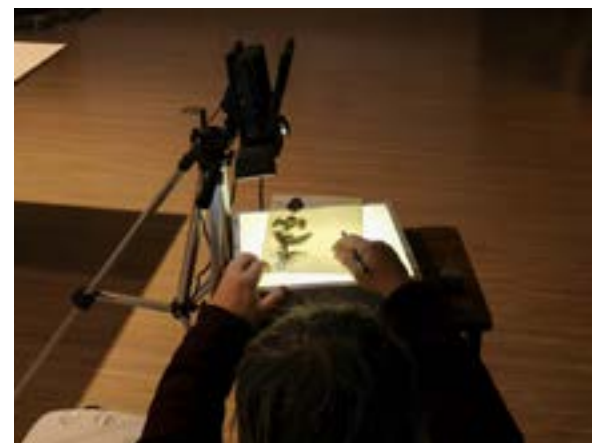
いろんな人の横顔やもらった言葉の、どんな表情も覚えていたい。きっと、つたえられなかったこと、もう、つたえられないかもしれないこと、オーバーでセルフ・サティスファクションな心をかくしてきたことを自覚したいま、そんな情報伝達もある。いったことがある場所も、まだ見知らぬ場所も、どこかでつながっているにちがいない。思いは届かずとも、夜の静寂を独りで見上げるような蒼い空に、紫から薄桃色に染まる雲が静止する瞬間に、だれかとだれかの世界の永遠性を感じる。時間の後先なんて、ほんとうはないかもしれない。「つくりかけラボ05」は終わったけれど、自分の意図しつづけることの責任において、来場者の方々と対話での意見交換を反芻して、考えつづける。

今日おもしろいと感じたこと、すてきな気持ちを明日にもっていけるだろうか。

「SF とりはうたう ひみつを」にご来場いただいたみなさん、VOQさん、市川さん、岡崎さん、真砂さん、山根さん、田口さん、美術館のみなさん、ほんとうにありがとう。

(松本力)

※本稿の全文は、千葉市美術館ウェブサイト「つくりかけラボ05 松本力 | SF とりはうたう ひみつを」のページで公開します。



松本力
まつもとちから

1967年東京生まれ、在住。1991年多摩美術大学美術学部デザイン科DGD専攻卒業。コマ割りのドローイングによる映像作品を制作。2002年より、オルガノラウンジや音楽家・VOQとのライブ活動を継続、手製映像装置「絵巻物マシーン」によるワークショップ「踊る人形」を学校や美術館、滞在先で行う。近年の展覧会は、2017年「アブラカダブラ 絵画展」(市原湖畔美術館)、「邂逅の海—交差するリアリズム」(沖縄県立博物館・美術館)、2018年「本の話、本の町」(港まちづくり協議会/名古屋)、2019年「さよならをいって、それからであう旅」(横浜市民ギャラリーあざみ野)、「記しを憶う—東京都写真美術館コレクションを中心に」(東京都美術館)、2021年「第13回恵比寿映像祭」(東京都写真美術館)などがある。
<http://chikara.p1.bindsite.jp>

新型コロナウイルス感染症の変異株が猛威を奮っていた昨年の夏、大勢が同じ場所に集まって何かをするというよりも、一人ひとりの体験がこのプロジェクトに小さな関わりとして積み上げられていくような機会を、それによって展示空間が育っていただけでなく、そこでの体験を持ち帰ったそれぞれの日常に少しずつ変化がもたらされることを期待しながら、松本さんとのやりとりを重ね、秋から始まるこの企画の準備を進めていました。

私たちが最初の頃に話していたのは、中学生くらいの若い人たちが、自分の居場所として何度でも足を運びたいようなプロジェクトにしたいということでした。また来たいという気持ちは帰り道(復路)につくられると松本さんは言いました。それが次の往路へと続くのだから。アニメーションの一コマ一コマのように積み重ねられる日々、この会場を訪ねては自分の場所(自宅)へと帰っていき、そして再び訪れるというかたちをとり、滞在制作ではなく通うことを選んだ松本さんは、「また来る」という来場者に期待する行為を、そうすることでここにもう一つの居場所を見つけることを、自ら率先して実践したといえるかもしれません。

会期中には、来場者だけでなくゲストアーティストの方々がそれぞれの世界を持ち込み、作品としての空間に変化を与えていきました。27日間に及ぶ公開制作の全過程で、ものをつくるよりもこの場を訪れる人との対話を優先させた松本さんの根底には、他人への敬意と信頼があったように思います。他者を尊重し、他者としてそのままに受け止めること、この側には、清々しい孤独(solitude)があり、創造のための内省へと向かう心があります。松本さんの長い移動時間と同じように、一人ずつしか入ることができない宇宙巣箱は、ここを訪ねた人々に、束の間の孤独と向き合う時間を用意しました。

とりがうたうひみつは、結局のところ人間には知る由もなく、あれこれ想像するしかないのだけれど、それは私とあなたの間でも同じであって、同じ時に同じ場所に身を置き、同じものを見ているようで、そうではない。自分の体験を一度手放して誰かに語り直してもらうことや、誰かの体験を自分の言葉で語り直してみることで、ものごとの見えていなかった部分が、不意に見えてくることもあるかもしれません。3ヶ月弱のあいだ松本さんがつくり続けたものは、誰かがずっと心に留めていた「すこしふしぎな話」の不思議さを、そのままストーンと受け取ることができる場所であったといえます。

(千葉市美術館 主任学芸員 山根佳奈)

つくりかけラボ05

松本力 | SF とりはうたう ひみつを

会期

2021年10月16日(土)–12月26日(日)

主催

千葉県美術館

展示設営

スーパーファクトリー

ゲストアーティスト

市川平 (特殊照明作家)

VOQ (音楽家)

岡崎彩加 (展示設営、ポッドキャスト出演/アーティスト)

公開制作

10/16,17,19,20,21,22,24,

11/6,7,11,20,21,23,27,28

12/4,5,11,12,15,17,18,19,23,24,25,26

来場者数

2,355人

(大人1,594人、中学生以下761人)

「つくりかけラボ05

松本力 | SF とりはうたう ひみつを」報告書

編集・発行

千葉県美術館

撮影

須崎隆善

デザイン

サイトヲヒデユキ (書肆サイコロ)

印刷

株式会社エイチケイグラフィックス

発行日

2022年3月31日

